

始皇帝

2022. 1. 4

「キングダム」を読んでいる。秦の始皇帝に関わる物語である。相変わらず、なかなか進まない。6つの国を滅ぼさなければならないのに、未だに一つも滅ぼしていない。

秦の始皇帝は、紀元前221年に戦国の六雄を滅ぼし、はじめて中国全土を統一した。彼は、2000年以上にも及ぶ文書行政によるエリートが支配する中央集権国家という中国のグランドデザインを確立した人物である。

その始皇帝が最後に執着したのが不老不死であることは知られている。先進国の中で世界一の平均寿命を誇る日本は、始皇帝が夢に描いていた理想に近づいている。しかも、人口トップ10の国々の中で平均寿命トップ10に入っている国は他にはない。

ところが、我が国の高齢化社会についてメディアや巷で見かける言説は、公的年金保険が崩壊して世の中には貧困のお年寄りがあふれかえる。あるいは、人々の寿命が延びた分、寝たきりのお年寄りが増加して周囲の負担がどんどん重くなる。将来の不安をあおるものばかりである。高齢者や高齢化社会の将来は、お先真っ暗である。

本当にそうなのだろうか。人は、歳を取ったら活躍とは縁遠くなり、貯蓄や年金を食いつぶしながら、肩身を狭くして生きていくしかないのだろうか。

その人の価値観や人生観などの色眼鏡をできるだけ外して、フラットに周囲の物事を見ないといけないように思う。根拠のない常識や不毛な精神論に縛られるのではなく、エビデンス（科学的な根拠）で世の中を見る必要がある。

現在、日本をはじめ多くの国では、高齢者は65歳以上と定義されている。なぜなのか。これは1965年に、WHO（世界保健機関）が65歳以上の人口が全人口の7%を超えると高齢者社会と呼ぶとの見解を発表したことがきっかけらしい。この定義に医学的・生物学的な根拠はない。当時の欧米諸国の平均寿命が男性が66歳前後、女性が72歳前後、日本は男性が63歳前後、女性が67歳前後だったことからそのまま受容されたようである。

当時の65歳と現在の65歳では、体力や若々しさが大きく異なるのではないか。多くの人がそう感じているだろう。医学の進歩や栄養状態の改善などにより、人間は昔よりも元気になっており、75歳以上を高齢者と定義しても不都合はないように思える。

では、何歳まで働くべきなのか。よくある問いかけである。教員をやっている以上は、定年制度があるため、そこまでは教員を続けるのが一般的だろう。その後は、教員以外の仕事をしてよい。その方が、新たな発見があり、おもしろいかもしれない。元気だったら仕事をすればいいし、しんどくなったら引退すればよい。いつまで働くのかと、年齢で決めなくてもいいのではなかろうか。

始皇帝が望んだ不老不死は無理だとしても、健康寿命を延ばすことはできる。長生きはできても元気がなく、思うように動けない生活になっては始皇帝もうれしくはないだろう。